

W・C・ミッチェルの経済学批判

—その序説的考察—

佐々野 謙 治

は じ め に

I ミッチェルの学史の課題と方法

II ミッチェルの学史の対象と構成

お わ り に

は じ め に

後世云々される経済学の理論を構築した偉大な経済学者達の中で、学史的研究（過去の経済学の批判的研究）を行い、しかるべき学史の著作を公けにしている人は、決して少なくない。思うに、自らの理論を構築する過程において、人は学史的研究の必要に迫られるのであろう。自らの理論を構築しえた人は人で、その理論をしかるべく位置づけようとして、あるいは自らの理論の到達点を示そうとして、学史の著作を公けにするのであろう。とすれば、こうして公けにされた著作を検討してみることは、その人の理論を解明していく上での大きな手助けとなるはずである。その人の構築しえた経済学の理論をポジとすれば、ネガに相当するのが、その人のなした学史的研究だ、とも言えるからだ。

さて、小稿で取り上げたミッチェル (Wesley C. Mitchell, 1874-1948) もまた、多くのエネルギーを学史的研究に注ぎ、かなりの頁数を有する学史の著作を公けにしているのである。『経済理論の諸類型——重商主義から制度主義まで』(Types of Economic Thought—From Mercantilism to Institution-
alism) というのがそれである。もっともこの著作は、正確に言えば、ミッチェル自身の手によって公けにされたものではない。それは、1913年から1937年に

かけてコロンビア大学でなされたミッチェルの講義録を基に、彼の死後、ドーフマン (Joseph Dorfman) の手によって編集・公刊されたものである¹⁾。しかし、ミッチェル自身、いずれこの著作を彼の代表作・『景気循環 (Business Cycles)』に続くものとして、公けにする計画を久しく抱いていた、と言われて²⁾。やはりミッチェルも、自らの立場を学史的研究を通じて位置づけし、今後の経済学の進むべき方向を示そうとしたのではないか。

とまれ、これからしばらく私は、ミッチェルの上述の学史の著作に展開された経済学批判の主要論点を、整理・検討していく予定である。また、そのことを通じて私は、その批判の論点の背後にあると解されるミッチェル自身の積極的主張を、浮き彫りにしていきたい。

とはいえ、ミッチェルの学史の著作の中に出てくる経済学者の数は多い。従って、そのすべてを取り上げて整理・検討することは困難だし、またその必要もないであろう。上述した私の課題——ミッチェルの経済学批判の主要論点を整理・検討することを通じて、ミッチェル自身の積極的主張を浮き彫りにするという私の課題——に関する限り、そうである。しかし、そうだとすると、ミッチェルの著作の中に出てくる多くの経済学者達の中から、一体誰を代表的なものとして取り上げて整理・検討したらよいのか。やはり、それなりの目安ないしは基準といったものが必要であろう。かくしてここに、ミッチェルの学史研究全体に関する諸見解を概観・整理することが必要になってくるであろう。それを行うことが、小稿の当面の課題なのである。従って、ミッチェルの過去の経済学に対する批判の論点を整理・検討していく、そのいわば序説的内容をなすのがこの小稿だ、と言ってよいであろう。

<注>

- 1) この間の詳しい事情についてはドーフマンの次に見られる叙述の参照を乞う。W. C. Mitchell, *Types of Economic Thought-From Mercantilism to Institutionalism*, ed. by Joseph Dorfman, New York, Augustus M. Kelley Publishers, 1967, Vol. I, pp. vii-xi. かくして編集・公刊されたミッチェルの学史の著作は、「シュンペーターの『経済分析の歴史』の刊行まで、アメリカのすぐれた多くの経済学者の中の一人が考えたものとして、学史の進歩という点での唯一の記録であった」と言われている。Henry W. Spiegel, *The Growth of Economic Thought*, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1971, p. 635.

- 2) T. W. Hutchison, *Historian of Economic Thought*, in Wesley Clair Mitchell — *The Economic Scientist*, ed. by A. F. Burns, New York, National Bureau of Economic Research, Inc., 1952, p. 293.

I. ミッチェルの学史の課題と方法

ミッチェルは、これまで存在してきた多くの経済学の理論を、若干の「類型」¹⁾として分類し、その考察・検討を企てる。すなわち、ミッチェルが考察・検討を企て、その歴史を描き出そうとしているのは、あくまで彼のいう類型として分類される経済学の理論の発展ないし変化なのである。それは、「経済学は科学としては、まだ粗雑な段階にあり、理論の一体系として存在するのではなく……理論の若干の類型として存在する」¹⁾からである。ところで、ここにいる「類型」とは、必ずしも我々が一般にいう「学派」と同一のものを指してはいない。ミッチェルは、これまで存在してきた多くの経済学の理論を若干の「類型」²⁾として分類せしめるメルクマールについて、次のように述べている。「確に、経済理論の若干の類型の基本的な相違は、相続く経済学者達が、この科学の中心的な問題と考えたところのものにある。より正確に言えば、それは、種々の経済理論家達が自らの関心の焦点として種々の経済問題を取り上げた、その力点の相違にある。しかしなお、それと関連した第二の区別要因がある。それは、経済学者達がそれで作業を行った人間性の概念である。人間性の概念は通常、経済学よりもむしろ心理学の主題とみなされている。しかし経済学は、人間行動のある局面を取り扱う科学である。今日では経済学といえば、多かれ少なかれ明白に、そのすべてが共通の問題——社会における人間の行動——に係りあう社会諸科学の一つだ、と考えられるようになりつつある。従って経済学は、社会学、政治学、人類学と密接な関係があり、また法学とも一定の関係を、心理学とも明らかに関係をもつものである」²⁾。

要するに、これまで存在してきた多くの経済学の理論を、若干の「類型」³⁾として分類せしめるメルクマールは、まず第一に経済学者達が何を自らの経済学の「中心的な問題」と考えたかという点に、次いで第二に経済学者達がいかな

る「人間性の概念」を自らの経済学の前提にしたかという点に、あるとミッチェルは言うのである。とすれば、経済学の理論の若干の「類型」の相違とは、何よりもまずそれが取り扱っている「中心的な問題」の相違だ、ということになるであろう。では何が、その「中心的な問題」の相違をもたらすのか。それは時代の問題の変化だ、とミッチェルは言うのである。とすれば結局、この時代の問題の変化が経済学の理論の「類型」の相違をもたらす、ということになるであろう。この点、ミッチェル自身が古典派経済学を中心に若干の例をあげて具体的に説明しているので、次にそれを見ておきたい。かなり長くなるが、ミッチェルの学史の内容の一端を伺い知る意味からも、以下、彼のその説明をそのまま訳出しておこう。

「論議される理論の第一の類型は、スミス (Adam Smith) の『国富論』によって提示されたそれである。彼は、国家経済計画の大きなシステムがしだいに分解し始めた時代を、また冒険的な企業家の側で個人的イニシアチブの実践が大量現象となりつつあった時代を、生きた。個人的イニシアチブの発現は、政府が国家計画の政策を実施する際に国民に課そうと努めた多くの方向づけによって、つまり政府がそれで私的個人のなすべきことを方向づけようと努めた大小種々の方策によって、ある程度まで——成方法を読んだ人がそこから予想したほどではないにしても——妨げられていた。(原文改行) スミスは元来、哲学者であった。彼はちょうど、経済学が哲学的関心の一般的体系からかなり明白に分離し始めた時代に生きた。一哲学者として彼は、私的個人の活動を統制しようと試みる一般的基本方針は諸国民の富の増大に有害だ、と確信するに至った。彼は、大家らしく誰にもわかるように次のような主張をした。すなわち、もし政府が私的個人の活動に対する干渉を最小限度にとどめるならば、もし各人が何であれ自分の私的利益に最も有利だと思える職業を選択できる自由を実質的にもてるようにされるならば、諸国民の富は最も急速に増大するであろう、と。この主張が、スミスの経済理論の中心に、富の生産の問題を、つまり生産はいかにすれば最もよく促進されるのかという問題を、すえさせたのである。この問題への解答が、それは物事を事実上放任しておくことによってだ、

というのであった。スミスは、実際のな問題を、つまり彼の時代に支配的な経済問題を、取り扱いつつあった。そして彼は、個人が他人と取り引きする際にそれに従ったが賢明である方策について、これといえる結論に達したのである。

その経済理論が考察される第二の人は、マルサス(Thomas Robert Malthus)である。彼は、18世紀末と19世紀初期の人口問題に関する指導的権威者であった。彼は、産業革命が人口の増加に著しい影響を及ぼし始めていた時代に生きた。工場制度の発生が下層階級に強いた驚くべき困窮について多くのことが伝え聞かれていたし、またその多くが、疑いもなく実際に生じた事象についての確な根拠のある報告であった。しかし、人口計数の示すところによれば、新しい機械技術と工場がイギリスの日常生活の重要な部分となりつつあったその期間を通じて、人口数は、未曾有の速度で増加しつつあった。政府の調査や公聴会——いわゆる『青書』——の多くが明らかにした恐れが存在したにもかかわらず、そうであった……(原文改行) この人口増加は、悲惨な問題を生じさせた。それは他の事象と結びついて、直ちに貧民を実質的に増加させ、またその彼らを助けるために教会区の財産所有者に課される税を増加させた。この状況をよく考えたやはり哲学的思想家の一人であったマルサスは、彼が人口の原理と呼んだところの記念碑的な結論に達した。また、『人口の原理に関する一論』(1798)において、彼はその結論を徹底的に論じ、貧民を取り扱う適切な方策に関して一定の考えを得るに至った。すなわち、自分自身で自分の面倒をみる責任を強化するということ、自分自身の努力で自分を救済できない人の場合だけ援助の手をさしのべるということ、がそれであった……

次に論評する上で重要な著者、またマルサスよりもずっと規模を拡大して取り上げられる人、それがリカード(David Ricard)である。彼は、自著・『政治経済学及び課税の原理』(1817)において、政治経済学の主要問題とは分配のそれだと告知することによって、経済理論のパースペクティブを変えたのである。スミスは彼の注意を富の生産に集中した。リカードが主に注意を払う必要のある問題とみなしたのは、国民の年々の生産物が三つの階級——資本家と労働者と地主——に分配されるそのやり方であった。(原文改行) 政治経済

学のこのパースペクティブの移動は、主要な問題の移動を反映したものであった。リカードの時代においては、議会での重大な経済問題は、いわゆる穀物条令によって表示された。特にこの条令は、小麦等の重要な主要食物の輸入に課税し、かつそれに諸制限を加えることをその特徴としていた。誰もが、この条令は食料品の価格を上昇させることになる、と考えた。それと同じく単純に、食料品の価格の上昇は、高貨幣賃金を、かくして生産費の増大を引き起こす、と誰もが考えた。また、商工関係者達にとって生産費の増大は、国内では外国製品との競争で、また外国市場を求めてなされる他国との競争で、不利になることを意味した。従って、その国で有力となりつつあった商工関係者達は、政府によって施行される経済政策が彼らの行動の拡大を妨げるのではないかとひどく懸念した。他方、議会で最も優勢であった地主関係者達は、その政策が農作物をめぐってなされる外国との競争を弱めることで彼らの地代を引き下げる手助けになる、と考えた。問題は歴然となった。それは、一方での資本家・雇用関係者と他方での地代取得関係者との間の分配に関する問題であった。これが、リカードが大家らしいやり方で取り扱った問題であった。この彼の著作の影響を受けて、分配の問題が経済的思考の中心的な位置を占めるに至り、以来それがずっと続いているのである。

ミル (John Stuart Mill) は、経済理論の発展においてのみならず、同じく大ブリテンにおける経済生活の発展においても、一歩進んだ段階を代表した人である。ミルは、彼の『政治経済学原理とその社会哲学への応用』(1848)を、大ブリテンが世界の工場・最大の工業国としてその地位を急速に固めつつあった時期に書いた。また彼は、その将来の成行きに多くの関心を抱いていた。彼の時代の不満足な経済組織が結晶して、大なり小なり永久的なものになるということ、それは実に恐ろしいことではあるが有りそうなことだ、と彼には思われた。そうなるということは、彼の見地からすれば、一大悲劇であった。彼は先駆者達よりはずっと深刻に、かつてスミスがそれを明らかにするために多くのことをなした生産の法則——今日ではそう呼ばれている——と、かつてリカードがそれを非常にすっきりと体系的に述べた分配の法則との間の違いについ

て、考え始めたのであった。ミルの考えたところによれば、人間による富の生産を支配している一方の原理と、人間の間への富の分配を支配している他方の原理との間には、根本的な違いがあった。(原文改行) ミルにとっては、生産の法則は物理的法則のような性格を有するもので、固定的で不変的なものであった。土地がある点まで耕作されると、資本や労働をさらに充用しても得られる収穫は相対的に減少していく、というこの事実は、誰も変えることはできない。そしてまた、生産の範囲は生産者によって用いられる資本によって制限される、というこの事実も、人は変えることはできない。しかしながら、富の分配の法則については、同様のことは妥当しない。これは、人間の制度に依存する。これは、真の意味での人造物である。そうしたものとして、これは、人間の取り決めによって変えることができる。従ってミルは、彼の時代に支配的であったものよりもずっと一般的福祉に有利な所得分配をもたらす、そうした種の制度を、しかるべく苦心して計画することが可能だと考えて未来に希望を見たのである。彼は、将来最大の見込みがあると彼が考えた特殊な型の組織——生産協同の体系——を、思い描いていた……」³⁾

以上、極めて長くなったが、経済学の理論の「類型」の相違をもたらすのは、あくまで時代の問題の変化だ、とミッチェルは言うのである。このことは、ミッチェルが経済学の内的な理論的發展ないし変化を認めないことを意味している。否、彼はそれを否定さえしているのだ。もっとも必ずしもそう全面的に言い切れない点を残してはいるが、この点については、後に小稿の「おわりに」で触れるつもりである。とまれ、以下のミッチェルの叙述に注目したい。

「スミスの時代から今日に至るまで、イギリスの政治経済学の発展の主なコースは、その大部分が当時の支配的な問題によって形づくられてきた。とにかく我々は、科学は生得権をもつものとして生誕し、論理的に発展することで成長してきた、と考えがちである。そう考えるのは数学のような科目にだけその注意を払ってのことであろう。ある発見者が一つの新しい観念を打ち出すとすれば、この一定の含みをもつ観念が次の著者達によって受容されるであろう。かくして各々の著者は、彼の前の著者のその説明から彼の主な示唆を得るであ

ろう。これが知的発展の過程なのである。

さて、ここで述べたことは、実際には数学には妥当しないし、おそらく物理学とか化学にはもっと妥当しないであろう。経済学においては、そのような知的発展が生じたと信じることは全くの誤りだ、と私は思う。諸観念をある者から他の者へと伝達し、かつこの諸観念を相続く世代の人々が知的曲芸さながらに発展させるということは、経済学の歴史においては、第一次的な要因というよりは第二次的な要因であった。相続く世代の経済学者達の精神を最も刺激したことは、彼らの世代全体の人々が関心を示した諸問題を理解することに貢献しようとするものであった。何よりもまず、先駆者達が提示した諸理論を改善し、その諸理論から矛盾をなくし、かつその諸理論にかなり高い水準での発展をもたらすということ、それを自らの姿勢にしていたと思われるアカデミックな著者達がいたことは、紛れもなく確である。特に経済学がアカデミックな主題となって以後はそうだ。そして、こうした見地が経済学の歴史において最も強調されてきたのである……。

それは思うに、むしろ誤った描写である。最も重要な要因は、リカードの世代の人々はスミスの世代の人々とは異なった種類の問題に直面していた、ということだ。すなわち、リカードが経済理論の見方を変えたのは、彼がスミスとは異なった環境の問題を深く考えたからなのである。かくしてまた、リカードに続く世代の人々が新しい観念・新しい側面の主題を作り出し、古典派の集団とは異なった観念・主題を与えたのは、彼らがリカードとは異なった諸問題に直面したからなのであった⁴⁾。

以上こうして、経済学の内的な理論的発展ないし変化を否定するミッチェルは、ここでもまた経済学の理論の「類型」の相違をもたらすのはあくまで時代の問題の変化だ、と言うのである。従ってまた、そのことを明らかにすることが、ミッチェルの学史の重要な課題——少なくともその一つ——になるのだ。すなわち、ミッチェルはその課題に関して次のように述べているのである。

「経済学の理論のいずれの概観であれ、その一つの結果・目的は、経済理論の重要な出発点は概して、時代の支配的な問題の変化に対する知的反応であっ

た、ということを示すことだ。すなわちそれは、経済思想の発展において最も評価された経済理論家達とは、彼らの時代の人々を悩ませた諸問題に非常に深い関心を示した人々であった、ということを示すことだ。彼らの理論は、将来役立つ見込みのある实际的行動の手段を指摘するために、彼らの時代の人々を悩ませた諸問題を科学的に取り扱う試みに他ならなかったのである⁵⁾ ……学史の主たる課題は、過去 200 年ほどの間の経済理論の歴史に、諸君を微に入り細をうがってなじませることにあるのではない。それは何よりも、進化している社会生活がもたらした諸問題を取り扱う、つまりその諸問題を考え抜くことによって取り扱う、人間苦闘の一部として、経済学が発展してきたその仕方に、諸君をなじませることにある。それは、相続く世代の人々が彼らの諸問題——彼らが困難点の中心・社会的関心を引く重大事と考えるもの——にいかに直面したかということを見ることによって、要するにその世代の人々がそのような重大性を付与した諸問題をいかに取り扱ったかということを見ることによって、なされる。かくして、学史の講義をなす者の目的は、何よりもまず取り上げられる書物のこれといった一般的特徴を指摘することであり、次に特にその書物と時代との関係を、つまりその書物がそこから発生し、従ってその一部を成す時代との関係を、論議することである」⁶⁾。

こうしてミッチェルは、これまで存在してきた多くの経済学者達が何を彼らの時代の中心的な問題とみたか、また彼らはその問題にいかに取り組んだか、なお彼らはその問題をいかに解決しようとしたか、それを見ていくのが学史研究の課題だ、と言うのである。このすぐれて実践的ともいえる課題からして察しはつくであろうが、ミッチェルの学史では、あくまで時代の問題とからめて経済学の理論の「類型」の発展ないし変化を解明していくという方法がとられることになるのである。しかし、だからといってミッチェルは、経済学の理論の「類型」を時代の問題の単なる反映だ、と解しているわけでは決してない。両者は相互作用の関係にあると解されており（たとえばスミスをミッチェルは「近代史のメーカー」としても描き出しているのだ）⁷⁾、従ってその相互作用を見ていくこと——両者の間を「不断に往復」⁸⁾ すること——が学史研究の最良

の方法だ、とミッチェルは言うのである。

ところで、その時代の問題を大きく規定しているのが、いうまでもなく経済であり、それを直接間接に映し出しているのが政治である。とすれば、ミッチェルの学史においては、その時代の問題を浮き彫りにするために、何よりもまず経済史的・政治史的背景の解明が必要とされるであろう。次に、こうして明らかにされた時代の問題に当時の経済学者達がいかに取り組んだか、その姿勢の解明が必要とされるであろう。それには、いうまでもなく、その経済学者の姿勢を規定ないし制約していると解される時代の思想や哲学、慣習といったものの解明が、広くは文化史的背景の解明が必要とされるであろう。また時代の問題といっても、それ自体が種々の局面を有しているはずである。そしてまた、このいずれの局面と取り組むかは、経済学者の個人的経歴ないし資質といったものが大きく作用するはずである。とすればまた、ここに伝記的研究も必要とされるであろう。

こうしてミッチェルの学史においては、時代のいわば物質的・観念的諸環境ないし諸要素の累積的相互作用の産物として経済学の理論の「類型」が描き出され、あくまでかかるものとしてその発展ないし変化が考察・検討されることになるのである。要するに、経済学の内的な理論的発展ないし変化を認めないミッチェルの学史においては、当然のことだが、そうした視点から経済学の理論の「類型」の発展ないし変化を考察・検討するということは、最後までなされないのである。何故か。それは結局、経済学の理論の真理の究極的検証を論理的な首尾一貫性に求めるというやり方にミッチェルが批判的・否定的であったことに由来する、と言えよう。グルーチャー (A. G. Gruchy) の叙述を借りれば、「ミッチェルは、デューイから、論理が人間行為において果たす役割について多くを学んだ。彼は、人々が彼らの周囲の世界に関する過度に論理的な説明によって欺かれたり、また事実の領域とかけ離れた＜でっちあげの理論＞に信頼を置いたりしがちであることを、発見した。プラトン (Platon) からマーシャルに至る思想家達は、論理的に首尾一貫した思想体系を創り出しており、また真理の究極的な検証としては論理的な首尾一貫性をもって満足していた。

論理的思考の基準によって導かれた一定の諸前提に基づく思索は、人が観察された事実からではなく仮説から全く公然と出発する数学のような領域においては、極めて実り多いことがわかった。しかし、そのような思索が社会科学のような他の思想の諸領域に持ち込まれた場合は、さほど実り多いものではなかった。経済学の領域においては、それは均衡論に帰着したが、この均衡論は現代の経済的事象の経過に十分な説明を与えることはできない、とミッチェルは考えた。⁹⁾ こうしてミッチェルは、経済学の理論の真理の究極的検証を、論理的な首尾一貫性に求めるやり方を排し、もっぱら時代の諸環境・諸現実との照応性にのみ求めるのである。とすれば今や、このミッチェルの学史において、経済学の理論の「類型」の発展ないし変化の考察・検討があくまで時代の問題とからめてなされ、それが経済学の内的な理論的発展ないし変化という視点からなされない所以も、明らかであろう。

なお最後に付言すれば、ミッチェルは、経済学を何よりも「人間行動のある局面」（人間の経済行動）に関する科学である¹⁰⁾、と考えた。そしてまた彼は、この経済学は人間の経済行動を「観察」することからではなく、それを「推論」する試みから生成したものだ¹¹⁾、と考えた。とすれば、この彼の学史においては、経済学者がいかなる「人間性の概念」を前提にしてきたかという点の解明が、とりわけ重視されてくることになるであろう。というのも、彼の経済学に対するその見解からすれば、経済学者は何かこれといった「人間性の概念」を前提にしざるをえなかったからであり、またかくして前提にされた「人間性の概念」がその経済学者の理論の内容を大きく規定していた、と解されるからである¹²⁾。たとえば、ヴェブレンに関する論文の中で、ミッチェルは、ヴェブレンが従来の経済学者と異なった「人間性の概念」を前提にすることで、彼の経済学の理論——否、その「全体の様子」——がいかに大きく変化したかを詳しく論じている¹³⁾。これまで存在してきた多くの経済学の理論を若干の「類型」として分類せしめる重要なメルクマールの一つとして、ミッチェルが「人間性の概念」に注目した所以であろう¹⁴⁾。

<注>

- 1) W. C. Mitchell, *Types of Economic Thought — From Mercantilism to Institutionalism*, ed. by Joseph Dorfman, New York, Augustus M. Kelley • Publisher, 1967, Vol. I, p. 13.
- 2) Ibid., pp. 31~32.
- 3) Ibid., pp. 13~20.
- 4) Ibid., pp. 99~100. 力点は佐々野.
- 5) Ibid., p. 13.
- 6) Ibid., p. 25.
- 7) こうした視点からミッチェルのスミス論をとりまとめた論文に、岡本典子「W.C. ミッチェルのアダム・スミス観」(和光大学経済学部創立10周年記念号, 1977年2月, 49~66頁)があるので、その参照を乞う。なお、ミッチェルのスミス論をとりまとめた論文は、次の文献中にも見い出される。佐々木晃『制度主義者たちと古典派経済理論』, 東洋経済新報社, 昭和45年4月, 69~105頁。佐々野謙治『アメリカ制度学派研究序説』, 創言社, 1982年5月, 118~128頁。
- 8) W. C. Mitchell, op. cit., p. 27.
- 9) Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought—The American Contribution*, New York, Augustus M. Kelley • Publisher, 1967, p. 250.
- 10) W. C. Mitchell, op. cit., p. 32.
- 11) Ibid., p. 30.
- 12) この文脈に関するミッチェル自身の説明は、Ibid., p. 192 に見い出されるので、その箇所の参照を乞う。また、こうしてミッチェルが人間性の概念を重視する視点は、シカゴ大学でジョン・デューイから受けた影響に帰される、とグルチーは言う。この点、詳しくは、A. G. Gruchy, op. cit., pp. 247~248 の参照を乞う。
- 13) W. C. Mitchell, *The Backward Arts of Spending Money and Other Essays*, New York, Augustus M. Kelley, Inc., 1950, pp. 304~305.
- 14) 経済学と人間性の概念に関するミッチェルの見解については、いずれ別稿にて詳しく取り上げる予定であるが、さしあたり W. C. Mitchell, op. cit., pp. 189~193 の参照を乞う。

II. ミッチェルの学史の対象と構成

ところで、ミッチェルが自らの学史の研究対象とする主な経済学者達とはいかなる人達なのか。先に見た彼の学史の課題からして察しがつくであろうが、それは時代の問題を最もよく考察した人達だということになるであろう。では、具体的にその人達とは誰と誰を指しているのか。この点についてはもちろん、ミッチェルの学史全体の構成を伺う意味からも、以下、彼の著作の総目次を以下に示しておこう。

I 古典派経済学の研究について

- II アダム・スミスとイングランドでの政治経済学の体系化のされ方
- III ジェレミイ・ベンサムと功利主義
- IV トーマス・ロバート・マルサスと経験的傾向
- V ディヴィッド・リカードと古典派経済学の成立
- VI 活動中の新社会科学——哲学的急進派
- VII 勝利の日の政治経済学
- VIII ジョン・ステュアート・ミルと古典派経済学の人間化
- IX 効用理論の台頭: W・スタンレイ・ジェボンズとカール・メンガー,
レオン・ワルラス
- X アルフレッド・マーシャルと新古典派経済学
- XI アメリカ経済学の発展とJ・B・クラークの役割
- XII フランク・A・フェッターとアメリカの心理学的学派
- XIII ハーバード・J・ダーヴェンポートと金銭主義者の論理
- XIV オーストリア一般理論: フレドリッヒ・ウィーザー
- XV ジョセフ・アロイス・シュンペーターとヴィルフォード・パレートの
純粋経済学
- XVI グスタフ・カッセルの数学的アプローチ
- XVII 社会価値学派: ベンジャミン
マクファレスター・アンダースン, J・R
- XVIII ジョン・A・ホブソンと厚生経済学
- XIX ドイツ歴史学派: グスタフ・フォン・シュモラー
- XX ソースタイン・ヴェブレンの制度的アプローチ
- XI ジョン・R・コモンズと集団行動の経済学
- XII 結論: 回顧と展望

以上¹⁾, ミッチェルの学史の構成がいかなるものかということが, またミッチェルが彼の学史研究の対象としてどのような経済学者達を選び出してくるのかということが, 大方のところわかるであろう。

もっとも, 小稿の「はじめに」でも述べたように, その総目次を上に見たミ

ミッチェルの学史の著作そのものが、ミッチェル自身の手によって編集・公刊されたものではない。従ってその構成はもちろん、ここに選出された経済学者達も、そのすべてをミッチェルが彼の著作に収めることを必要だとみなしていた人達なのか否か、定かではない。なお、すぐに気付くであろうが、マルクス(K. Marx)がその考察対象からはずされている。少なくとも彼に独立の章を設けての言及はなされていない。これはしかし、ミッチェルが必ずしもマルクスを軽視し、その考察を不用と解していたからではないのである。「当時コロンビア大学(ミッチェルの学史の著作は、この大学でなされた彼の講義を基にして、彼の死後、ドーフマンの手によって編集・公刊されたものである)においては、社会主義に関する1ヵ年のコースが、すでにウラジミール・シンコヴィッチ(Vladimir Simkhovitch)によって担当されていた。従ってミッチェルは、マルクスの詳細かつ体系的な取り扱いを、その僚友に委ねてよかろうと思ったのである」²⁾。要するに、ミッチェルがマルクスに立ち入った言及をしていないのは、単に便宜上のことであったと解されるのである。

とまれミッチェルは、彼の学史の著作の総目次に見る経済学者達の理論を、彼のいう経済学の理論の「類型」を何らかの形で代表するものとして、順を追いつつ考察・検討していくのだ。彼は、その考察手順を次のように述べている。「このコースは、経済理論の祖先の蓄積、つまり古典派経済学から出発する。この古典派経済学は、まずイングランドでスミスの手によって発展させられ、それからマルサスとリカードの手によって一段と体系化され、その強調点を変えられ、そして最後にミルによってなお一段と体系的なやり方で解説されたものである。この広い経済理論の類型になじんだ後に、その祖先の蓄積から相續いて発展したかなり多くの種類の経済理論の類型を、我々は取り扱うであろう。これは、1871年にジェボンズ(W. Stanley Jevons)——彼は自著・『政治経済学の理論』の中で彼が<効用の機構>と呼んだものを完成した——によってなされた活発な企から出発し、そして次にマーシャル(Alfred Marschall)の再々新古典主義と呼ばれている偉大な努力に、つまりマーシャルが1890年に自著・『経済学原理』において古典的分析を効用分析と結びつけようとした偉

大な努力に、移る。さらにそれから、その人々とは全く異なった見地から諸問題にアプローチした研究者達の努力を、たとえばカッセル(Gustav Cassel)のそれとは著しく異なっているヴェブレレン(Thorstein Velen)の著作を、取り上げる」³⁾。

ところで、先に見たミッチェルの学史の著作の総目次はもちろん、ここに引用した叙述に注目してみても、ミッチェルによって考察・検討される経済学の理論の「類型」は決して少なくない、と言えるであろう。しかし、つまるところその「類型」は二つに大別される、と言ってよいのではないか。以下、この点について見ていくが、これまで存在してきた多くの経済学の理論を若干の「類型」として分類せしめるメルクマールについてミッチェルが述べていたところを、ここにもう一度想起しておきたい。そのメルクマールは、まず第一に経済学者達が何を自らの経済学の「中心的な問題」とみなしたかという点に、次いで第二に経済学者達が自らの経済学の前提にいかなる「人間性の概念」を置いたかという点に、あった。

さて、すでに引用した箇所の一部ではあるが、再度次のミッチェルの叙述に注目したい。「スミスは大家らしく誰にもわかるように次のように主張した。すなわち、もし政府が私的個人の活動に対する干渉を最小限度にとどめるならば……諸国民の富は最も急速に増大するであろう、と。この主張がスミスの経済理論の中心に富の生産の問題を、つまり生産はいかにすれば最もよく促進されるのかという問題を、すえさせたのである……スミスは実際的な問題を、つまり彼の時代に支配的な経済問題を、取り扱っていた……その経済理論が考察される第二の人はマルサスである。彼は、18世紀末と19世紀初期の人口問題の指導的権威者であった……このマルサスよりもずっと規模を拡大して取り上げられる人、それがリカードである。彼は、政治経済学の主要問題とは分配の問題だと告知することで、経済理論のパースペクティブを変えたのである……ミルは、かつてスミスがそれを明らかにするために多くのことをなした生産の法則——今日ではそう呼ばれる——と、かつてリカードがそれを非常にすっきりと体系的に述べた分配の法則との間の違いについて考え始めたのであった……」⁴⁾

実は、以上の叙述をしめくくる形で、ミッチェルは次のように述べているのである。すなわち、「大まかに言って、リカードが分配の問題を強調することで発展させた理論の類型は、全体的に見て……依然として支配的なまま今日に至っている。しかし、それは、リカード派の枠組の内部で、一種類以上の価値一分配の経済学を生み出してきたのである」⁹⁾と。以下、続けてミッチェルの述べるところを見ていこう。

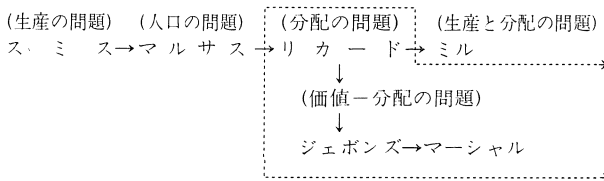
「その一つの新しい種類が、ジェボンズつまり彼の『政治経済学の理論』(1871)——これをジェボンズは〈効用の機構〉と呼んだ——であった。彼は、リカードやミルには基本的な誤りがある、と考えた。この誤りは、彼らが価値を、従って分配を、費用分析に基づいて説明している点にあった。ジェボンズの目からすれば……種々の財貨の価値は効用の変化に基づいて説明されるべきであった。また彼は、価値論を分配論の基礎となす考えを展開した。(原文改行)このジェボンズの考えは、マーシャルが彼の『経済学原理』の中で実際に押し進めたそれである。経済学の問題に関するマーシャルの一般の見解は、次の点でスミスやリカードやミルのそれとは異なっていた。すなわち、経済学の中心的な問題を価値の問題に見た点がそれである。また、この価値は分配を包含しているのである。というのも、労働者が得る賃金の問題は、その労働に付される価値の問題、つまり労働者の労働の交換価値の問題であるからだ。地主へ渡る地代の問題は、土地の使用権に付される価値の問題であるからだ。利子の問題も同様に、資本の使用権の価値の問題であるからだ。そして最後に、利潤の問題は、その巧妙な価格決定の過程を通じて社会が企業経営の役務に付する価値の問題であるからだ。こうして人は、マーシャルにおいて、経済学の問題に関する新しい見解を得るのである。

次に、スミスからマーシャルに至る経済的思考の主要系列中に現れている、その微細な違いから一躍して、ヴェブレンによって代表される理論の類型を取り上げよう。彼は専門的には、哲学者としての訓練を受けた人であった。彼は、カント (Immanuel Kant) を深く理解したカント学徒であった。彼はまた、自然科学にも多大の関心を抱いていた。彼はカントの学徒であるに負けず劣らず、

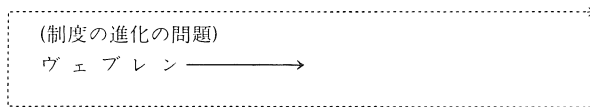
ダーウィン (Charles Darwin) とスペンサー (Herbert Spencer) の学徒でもあった。ヴェブレンは、環境のしからしめるところによって、彼の主な関心事であった哲学から経済学へ彼の注意を向けた。『国富論』の公刊以来、あるいはそれ以前から発展してきたこの科学つまり経済学に、彼は、カントの批判とダーウィンの進化論に精通した人の目をもって、注目するに至った。(原文改行) 彼には、経済学者達は彼らの中心的な問題を見誤ってきた、と思われた。経済学の中心的な問題とは、マーシャルが述べたような形の問題つまり価値一分配の問題ではなくて、経済制度の進化の問題であった。経済学は進化の途上にあった。ヴェブレンの見解によれば、経済学はダーウィンが初めて変化についてなした議論の延長線にあった。すなわち、ある種の動物が環境の緊急事態に自らを適応させるやり方で今だに変化しているのが、経済学なのであった。この見解は、経済学に対して従来のもとは異なった見方を生じさせたとし、そしてまた、スミスやマーシャルにも明らかでなかった諸事実を、この特殊な理論家・ヴェブレンの視野に取り込ませたのであった⁶⁾。

さて、以上見てきたミッチェルの叙述を、ここに図式化して示すと次のようになるであろう。ただし、この図式に示した「人間性の概念」については、後述する内容を先取りしたものである。

(1) 古典・新古典派の経済学——ベンサム的人間性の概念



(2) 制度主義の経済学——反ベンサム的人間性の概念



こうして今や、ミッチェルのいう経済学の理論の若干の「類型」とは、つまるところ二つに大別されると言えるであろう。すなわち、「価値一分配」を中心的な問題にした類型の経済学＝古典・新古典派の経済学と「制度の進化」を中心的な問題にした類型の経済学＝制度主義の経済学というのがそれである。もっともかく言えるのは、これまで存在してきた多くの経済学の理論を若干の「類型」として分類せしめるとミッチェルのいう第一のメルクマール、つまり経済学者が何を自らの経済学の「中心的な問題」と考えたかという点に照らしてみてものである。では、ミッチェルのいうその第二のメルクマール、つまり経済学者がいかなる「人間性の概念」を自らの経済学の前提にしていたかという点に照らしてみても、はたしてそう言えるであろうか。以下、この点について見てみたい。

さてミッチェルによれば、従来の経済学とりわり古典・新古典派の経済学のおよそが前提にしていたと解される「人間性の概念」と全く異なったそれを打ち出し、それを自らの経済学の前提にしたのは、制度主義の経済学者ヴェブレンなのである。なお、ミッチェルの次の叙述に注目したい。「ヴェブレンは、ダーウィンやジェームスや人類学の諸記録を基に、人間性に関する彼自身の観念を形成した。生物学者や偏見をもたない観察者にとっては、人間は本質的に能動的なものである。人間は、ベンサムが考えたように、＜快樂と苦痛という二つの主権者＞の下に置かれているのではない。そうではなくて人間は、自らのイニシアチブを基に、絶えず何事かを行っているのである。従って、快樂と苦痛あるいは満足と犠牲という＜現実的な諸力＞が人間行為を決定するという前提に立って（古典・新古典派経済学者がそうしたように）、これらの諸力を研究するのではなくて、経済学者は、まず人間行動の諸過程を研究すべきである。この目的のために重要な心理学的範疇は、快樂の計算法と連想観念ではなくて、性向と慣習である」⁷⁾。この叙述は、ミッチェルがヴェブレンを論評してなしたものであるが、ヴェブレンに最も近かったといわれる⁸⁾ 彼自身の立場をも、表明したものと解してよいであろう。

とすれば、次のように言えるであろう。すなわち、「価値一分配」を中心的

な問題にした「類型」の経済学＝古典・新古典派の経済学のおよそが、基本的には二つと解されている「人間性の概念」の一つを、つまりベンサム的人間性の概念（快樂主義的・受動的人間観）を前提にしていたとすれば、それと全く異なったもう一つの反ベンサム的人間性の概念（慣習的・能動的人間観）を前提にしていたのが、他ならぬ「制度の進化」を中心的な問題にした「類型」の経済学＝制度主義の経済学であった、と。かくして今や、これまで存在してきた多くの経済学の理論を若干の「類型」に分類せしめるとミッチェルのいう第二のメルクマールに照らしてみても、やはりミッチェルのいう経済学の「類型」は二つに大別される、と言えるであろう。

ところで、つまるところ二つに大別された経済学の「類型」のうちの一つ、つまり今日なお支配的と解される「価値一分配」を中心的な問題にしている「類型」の経済学の源流がリカードであることは、すでに先の図式においても示しておいた。要するに、経済学の二大「類型」の一方を根源的に代表しているのがリカードだ、とミッチェルは解しているのである。とすれば次のように言われる所以も明らかであろう。すなわち、「リカードの一段と正統派的な若干の後裔達に対するよりもリカードに対して、ミッチェルは、ずっと深く共鳴した説明を与え、かつ彼を擁護しているのである」⁹⁾と。もっとも、だからと言ってミッチェルは、この「類型」の経済学＝古典・新古典派の経済学に与するわけでは決してない。では他方、「制度の進化」を中心的な問題にしたもう一つの「類型」の経済学＝制度主義の経済学の源流は誰に求められるのか。それは厳密に言えば、ヴェブレンになのである。

確に、歴史学派の経済学はもちろんマルクス経済学も、制度の進化を「中心的な問題」にした経済学である、と言ってよいであろう。とすれば、これまで存続してきた多くの経済学の理論を若干の「類型」に分類せしめるとミッチェルのいう第一のメルクマールに照らしてみる限り、歴史学派の経済学もマルクス経済学も制度主義の経済学に属すると言ってよいであろう。そして事実また、ミッチェルは歴史学派の経済学と並べてマルクス経済学を制度主義の経済学とみなしてもいるのである¹⁰⁾。とすればまた、マルクスをもって制度主義経済学

の源流とみなすこともできるではないか。しかし、歴史学派はともかくも、マルクス経済学に関していえば、他方のもう一つの類型の経済学、つまり古典・新古典派の経済学に属するとも言えるのである。というのも、「ベンサムの人間性の概念」を前提にしていたという点では、マルクスも古典・新古典派の経済学者と同様であったからだ。以下のミッチェルの叙述に注目したい。

「ヴェブレンの時代よりも少し前に、ドイツ歴史学派は、正統派経済学の相対性をすでに認めていた。しかし、この学派の人々は彼らが輕蔑ないし拒否した理論に対する科学的代替物を生み出すには至らなかった。この点、マルクスは歴史学派より建設的であった。ヴェブレンの見解によれば、マルクスはすでに勇敢にも文化の分析を始めていた。もっとも彼は、ヘーゲル (Hegel) に由来する非現実的な形而上学と、ベンサムに由来する皮相的な心理学とによってハンデキャップを受けていたのだが。ベンサムの影響はマルクスをして階級的利害に関する理論を展開させたが、この陳腐な理論は、ある思考習慣を金銭的職業を通じて企業家が身につける方法と、またそれとは全く異なった思考習慣を賃金労働者が——彼らが拘束されている機械的過程を通じて——身につける方法を、看過している。ヘーゲルの影響は、社会の進化（制度の進化）に関するマルクスの理論を、本質的に＜社会主義の最終的段階の階級なき経済構造＞という一つの目標に向う知的論理に作り上げさせた。しかるにダーウィンの思想体系は、＜傾向も最終的段階も完成もない盲目的な累積的因果分析をもくろむ……（ヴェブレンによれば）このダーウィンの見解が、社会科学者の間に普及するであろう。というのは、それが先向者達よりも形而上学的なものでないからとか、あるいは真理——どのような意味であれ——に近いからとか、いうのではない。それが21世紀における日々の労働を通じて抱かれた思想と一層調和するからなのである。大部分の経済学者達が伝統的分析をなおも固執していることは、ヴェブレンにとっては、社会理論における文化的ラグ——制度的アプローチによって容易に説明されるラグ——を示している最近の例にすぎない」¹¹⁾。

以上の叙述も、先に見たそれと同じく、ミッチェルがヴェブレンを論評してなしたものであるが、それは大方ミッチェルの立場をも表明したものだ、と解

してよいであろう。かくしてミッチェルは、厳密に言えば、歴史学派の経済学者やマルクスではなく、ヴェブレンをもって「制度の進化」を中心的な問題にした「類型」の経済学—制度主義経済学の源流とみなしている、と言えるであろう。思うにミッチェルは、反古典の歴史学派の経済学やマルクス経済学はヴェブレンの制度主義経済学に収斂する、と解していたのではないか。また、その限りで彼は、歴史学派の経済学やマルクス経済学を、古典・新古典派の経済学よりも高く評価していた、と言えはしないか。

最後にベンサムについて若干見ておきたい。ミッチェルは、概して経済学史においては余り取り上げられることのないベンサムに、彼の学史の著作のかなりの頁をさいて言及しているのである。否、彼はベンサムのために独立の章を設けてさえいるのだ。それは、すでに述べたように、ミッチェルのいう経済学の二大類型の一つ、つまり古典・新古典派の経済学のすべてが、否マルクス経済学でさえもが、ベンサムの人間性の概念を前提にしていた、と解されるからである。そしてまた、これらの経済学がはらむ問題の多くが、実はこのベンサムの人間性の概念を前提にしていたところにある、と解されるからである¹²⁾。とすれば、ミッチェルの経済学批判において、ベンサムが大きな意味をもってくることは、おのずと明らかであろう。

以上こうして、ミッチェルの経済学批判の対象として欠くことのできない重要な人とは、リカードとベンサムとヴェブレンの三人だ、と言ってよいであろう。従ってまた、ミッチェルの過去の経済学に対する批判の論点を整理・検討することを通じて彼の積極的主張を浮き彫りにしようとするれば、少なくともその三人に対するミッチェルの批判の論点を整理・検討することが必要だ、と言えるであろう。

<注>

1) W. C. Mitchell, *Types of Economic Thought — From Mercantilism to Institutionalism*, ed. by Joseph Dorfman, New York, Augustus M. Kelley · Publisher, 1967, Vol. I, II の目次を参照。なお、I ～VIII 章が Vol. I の内容を成し、IX ～XXII 章が Vol. II の内容を成す。

2) Ibid., P.X. () 内は佐々野。

- 3) Ibid., p. 33. 力点は佐々野。
- 4) Ibid., pp. 13~20. 力点は佐々野。
- 5) Ibid., p. 20. 力点は佐々野。
- 6) Ibid., pp. 20~21. 力点佐々野。
- 7) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays*, New York, Augustus M. Kelley, Inc., 1950, p. 294. () 内は佐々野。
- 8) 「ヴェブレンの最もすぐれた弟子であり、また賛美者はウェズレー・クレア・ミッチェルである。ミッチェルは、ヴェブレンとは非常に異なった気質の持主であったが、彼の恩師の正統派理論批判の多くに感銘を覚えた。」Richard T. Gill, *Evolution of Modern Economics*, New Sersey: Prentice-Hall, Inc., 1967, p. 70.
- 9) T. W. Hutchison, *Historian of Economic Thought*, in Wesley Clair Mitchell — *The Economic Scientist*, ed. by A. F. Burns, New York, National Bureau of Economic Research, Inc., 1952, p. 299.
- 10) W. C. Mitchell, op. cit., pp. 363~364.
- 11) Ibid., pp. 311~312. 力点は佐々野。
- 12) T. W. Hutchins, opo. cit., p. 297.

お わ り に

従来の学史研究のすべての方法は結局、「絶対主義」と「相対主義」のいずれかに大別される、とブローグ (M. Blaug) は言う。ここにいう絶対主義とは、経済学の歴史をその誤りが徐々に訂正されながら着実に真理に向って進行する過程とみなすものであり、その代表例がシュンペーター (J. Schmpeter) の方法である。これに反して、ここにいう相対主義とは、過去に提示された各々の経済学を歴史的環境の反映とみなすことで、その各々の理論を等しく正当化しようとするものである。この相対主義の代表例として、ブローグは、ミッチェルの方法をあげている¹⁾。そこで、もう少し立ち入ってブローグの言うところを聞けば、絶対主義と相対主義という上述の二つの学史の研究方法は、その各々がさらに再分割されるのである。すなわち相対主義には、経済学の理論の変化をもたらす規定要因を事実としての経済に、あるいはそれをもっと狭く限定して階級的経済利害に求めるものがあり、またその規定要因を事実としての経済はもとより、広く政治・哲学・道徳といったものにまで求める「穏和」なものがある。前者の代表例がマルクスの方法だとすれば、後者の代表例が、しかもその最適の例がミッチェルのそれだ、とブローグは言うのである²⁾。

さて、ブローグにならって、従来の学史の研究方法を絶対主義と相対主義に大別するとすれば、これまで小稿において見てきたミッチェルの学史の研究方法は、確に相対主義の一種だとみなしうるであろう。経済思想とはすぐれて社会的環境の産物であり、経済学者はいかなる意味においても自らの環境を超越できない³⁾、というのがミッチェルの見解であった。しかも、ここに彼のいう環境とは、広く経済的・政治的・哲学的・道徳的諸環境を指していた。また、こうした諸環境ないし諸要素の各々に規定されたものとして、経済学の理論の「類型」の歴史的变化をたどっていくのが、ミッチェルの学史の研究方法であった。とすれば、この彼の学史の研究方法は、相対主義の中でも確に、ブローグの言うように、「穏和」なそれだと言ってよいであろう。但し、このミッチェルの学史の研究方法の特徴は、単に「穏和」なそれだという点ではなく、経済的・政治的・哲学的・道徳的諸環境の歴史的な累積の相互作用を強調している点にこそ求められるべきであろう⁴⁾。もちろん、そうした各々の諸環境ないし諸要素の歴史的な累積の相互作用に規定されたものとして、経済学の理論の「類型」の歴史を描き出すということは、ハチスンの指摘を待つまでもなく⁵⁾、ミッチェルほどの広い学識があつて初めてなしうることであった。なお付言すれば、ミッチェルの学史研究は、すぐれて実践的な色調を有していた。

ところで、そうした特徴を有しているミッチェルの学史の研究方法にも、種々の問題がないわけでは決してない。しかしここでは、その方法自体を問題にするのではなく、ミッチェルの学史の研究方法が彼の学史全体に必ずしも貫かれていない⁶⁾、といわれている点だけを問題とするに留めたい。確にミッチェルは、一方で自らが「知的曲芸」として強く否定した経済学の内的な理論的發展ないし変化を他方で認め、しかるべき研究方法をとっているのである。1870年代以降、特に古典派以後の古典派経済学の発展、つまり新古典派経済学の発展を取り扱っている箇所の叙述においてが、そうである。

ここで再度ブローグのいうところに注目したい。彼は言う、いかなる相対主義者といえども、古典派時代から後は、制度的・歴史的解釈をもち込みえなかったのであり、故に相対主義者は近代の時代を無視するか、その取り扱いの根

拠を移動させるかしているものであり、この点ミッチェルも例外ではなく、彼は近代の時期を無視しているのである⁷⁾、と。しかし、ミッチェルの学史の著作の目次をただでわかることだが、彼は決して近代の時期を無視などしてはいないのである。この点でのミッチェルはむしろ、その取り扱いの根拠を移動させている、と言われるべきであろう。そしてまた事実、彼の学史の研究方法には一貫性が欠けているとか、その方法に矛盾があるとか言われているのも、その点においてなのである。しかし、そう安易に言ってすまうことができるものなのか。ミッチェルが考察・検討し、その歴史を描き出そうとしているのは、その各々があくまで彼のいう類型として分類される経済学の理論の発展ないし変化であった。スミスからリカードを経てミルへ、というのがそれである。そして、この限りにおいては、ブローグのいう相対主義的方法が一貫してとられているのである。というのも、ミッチェルがそれと別様の方法——ブローグのいう絶対主義的方法——をとっているのは、彼があくまで同じ類型内にあると解している経済学の理論の発展ないし変化の取り扱いにおいてだからである。以下、この点をもう少し詳しく見てみよう。

これまで存在してきた多くの経済学の理論は、ミッチェルによれば、つまりところ二つの「類型」に大別された。「価値—分配」を中心的な問題にした「類型」の経済学＝古典・新古典派の経済学と「制度の進化」を中心的な問題にした「類型」の経済学＝制度主義の経済学というのがそれであった。この前者の「類型」の経済学の中心・源流をなすのはリカードの経済学であり、それはジェボンズやワルラス、マーシャルを経て今日に至っている、と解されていた。ミッチェルが、経済学の内的な理論的発展ないし変化を認め、従ってブローグのいう「絶対主義的方法」をとって研究を行っているのは、そのジェボンズからマーシャルに至る経済学についてなのであり、従ってミッチェルによれば、あくまでリカード派の枠組の内部で生成かつ発展したと解される経済学についてなのである。ところで、ミッチェルが描き出そうとしていたのは、その各々が彼のいわゆる類型として分類される経済学の理論の変化ないし発展の過程、つまりスミスからリカードを経てミルに至る経済学の流れであった。そして、

この限りにおいては、依然としてブローグのいう「相対主義的方法」が一貫してとられているのである。ということは、言葉を換えれば、ミッチェルの学史のその課題からする限り、彼の研究方法に一貫性が欠けているとは決して言えないということだ。そしてまた、ミッチェルの上述の二つの研究方法が直ちに対立・矛盾した関係にあるとも、決して言えないはずである。というのは、その二つの研究方法がとられた次元(位相)が確に別様であるからだ。なおまた、モンターネルが言うように⁸⁾、研究対象に応じて——研究対象それ自体が有する性質に応じて——適切な方法を弾力的にとるのが、制度主義的方法だとすれば、ミッチェルのそのやり方こそ制度主義的な方法であった、とさえ言えるのである。

ところで、小稿における私の課題はこうであった。すなわち、ミッチェルの学史の著作に展開されている経済学批判の論点を整理・検討する作業に先立って、ひとまず彼の学史全体に関する見解を概観・整理することにあつた。というのは、上述の作業を行うにしても、ミッチェルがその対象にしている経済学者の数は多く、一体その中から誰を代表的なものとして取り上げたらよいのか、という問題が生じたからである。逆に言えば、この問題を解決することを目的として私は、ミッチェルの学史全体に関する諸見解を概観・整理するという作業を行ったのである。それによれば、すでに小稿Ⅱの末尾で述べたように、ミッチェルの過去の経済学に対する批判の論点を整理・検討するその作業対象として、どうしても欠くことのできない人、それはリカードとベンサムとヴェブレンの三人であった。そこで、この三人に対するミッチェルの批判の論点を整理・検討することによって、彼の積極的主張を浮き彫りにしていくこと、これが次の私の課題である。

<注>

- 1) M・ブローグ『経済理論の歴史(上)』久保・真実・杉原訳、東洋経済新報社、昭和48年8月、4～5頁。
- 2) 上掲訳書、4～5頁。
- 3) W. C. Mitchell, *Types of Economic Thought — From Mercantilism to Institutionalism*, ed. by Joseph Dorfman, New York, Augustus M. Kelley Publisher, 1967, Vol. I, pp. 36～37.

- 4) ミッチェルの学史の「いちじるしい特徴は、基本的にダーウィン主義の考え方である累積的因果関係に関する理論を適用していることである」(佐々木晃『制度主義者達と古典派経済理論』東洋経済新報社、昭和45年4月、111頁)、という指摘もまた、ほぼこの点に関してなされたものだ、と解してよいであろう。
- 5) T. W. Hutchison, *Historian of Economic Thought*, in Wesley Clair Mitchell — *The Economic Scientist*, ed. by A. F. Burns, New York, National Bureau of Economic Research, Inc., 1952, p. 295.
- 6) *Ibid.*, p. 292, p. 299.
- 7) M・ブローグ, 上掲訳書, 6頁。
- 8) Antonio Montaner, *Der Institutionalismus als Epoche ameriknischer Geistesgeschichte*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen, 1948, S. 92, A・モンターネル『制度主義論—アメリカ思想史の一齣』佐々野謙治訳, 1983年10月, 120頁。